

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク

N e t w o r k

No.356 2018年10月号

特集

こども・若者が想いを形にし、 社会のつくり手となるために

思い立ったがボラ^ッ日

地球の友と歩む会／LIFE

セルフヘルプという力 第15回

Spring

～性被害当事者が生きやすい社会をめざして

いいもの みい～つけた! vol.15

ESAアジア教育支援の会

あすマネ

子どもを対象とした活動だから
学校で活動したい！





思い立ったが

ジツ
ボラ白



このコーナーでは、毎回一つの団体取材し、活動内容やそこで活動するボランティアさんの生の声をお届けします。

特定非営利活動法人 地球の友と歩む会／LIFE

地球の友と歩む会／LIFE
(Live with Friends on the Earth)

「誰でも気軽に、少しでも興味を持ってボランティアをしてもらえるように」—そんな時間が会場には流れていた。

ボランティアに参加した中高生たちは、日本語をインドネシア語に翻訳した紙を黙々と、だ

が真剣に絵本に貼りつけていた。「これなら、はじめての私にもできると思っ

て」と、体験ボランティアに参加していた高校生が照れながら話してくれた。

今回は、「子どもたちのボランティア活動の第一歩をサポートしたい」、そんな思いで活動する

「地球の友と歩む会」が行っているボランティア体験プログラムに参加させていただいた。

国際協力のリアルを伝える

今回取材した地球の友と歩む会（以下、LIFE）は国際協力NGOとしてインドやインドネシアで農業指導や子どもの教育支援を中心に



写真提供:LIFE



写真提供:LIFE

活動している。

その活動の一部として、日本語の絵本をインドネシア語に翻訳し、現地に届けている。LIFEは、この活動を児童・中高生向けの体験ボランティア活動として開催しており、インドネシア語に翻訳された文章を絵本に貼るボランティアを行っている。

活動を始める前に、子どもたちへのミニ授業が始まった。

「インドネシアのスンバ島というところでは、年間5000円から1万円の収入で生活している人があるんです」。LIFEスタッフの佐藤さんは、参加している中高生に、手作りのフリップを使いながら真剣に語りかける。聞き手も目の色が変わり始めた。

「それでも、本や文房具の値段は日本と変わらないため、とても貴重なんです」。現地の子どもたちが読書に慣れ親しむ環境がない。そんな実態からこのボランティア活動は始まったと佐藤さんは教えてくれた。





仕上げた絵本を掲げて、笑顔！



作業はシンプルだが、きれいに仕上げるのは難しい。真剣な高校生ボランティア。



翻訳が貼られた絵本は海を渡り、外国の子どもたちへ届けられる。



絵本好きな大人も楽しめる活動だ。

日本発の絵本をインドネシアの子どもたちに届けるために

現地の言葉に翻訳された絵本を作るには、まず日本語の原文を白紙で覆うことから始める。その上から、現地の言葉に翻訳された文章を貼りつけるのだが、これが難しい！

文字が小さいため、丁寧に、紙がゆがまないようにのりづけするのは至難のわざだ。神経を使うこの作業について手が汗ばむ。

「インドネシアの子どもたちが読む最初の絵本になるかもしれない。丁寧に作ってくださいね」。佐藤さんの想いに、子どもたちも呼応するように一段と真剣に取り組む。

コンパクトに起承転結がまとめられている絵本だが、一文一文翻訳する作業をしていると、改めて「本」というもののメッセージ性を感じる。絵本が伝えようとしている「友情」や「思いやりのこころ」は、日本語から変わったところで揺るがないのだろう。

ボランティアに親しむ最初の一步を

「人見知りなので、施設とかにボランティア行くのは……」と参加している女子生徒が話してくれた。

今回参加させていただいたボランティアは、作業自体は単純なものであった。しかし、「誰でも気軽に参加できる」活動であったことが子どもたちにとっては大変魅力的だったようだ。

大変な暮らしをしている人がいるというのは遠い国のことだが、「人を救う活動の輪の中に入る第一歩となればよい」と佐藤さん。

ボランティアに参加した皆が真剣に作業した2時間が、現地の子どもたちがステキな「絵本」と出会うかけがえのない時間に変わっていくことを願ってやまない。

次ページでは活動内容を

紹介しています

特定非営利活動法人 地球の友と歩む会／LIFE

<http://www.earth-ngo.jp/>

【連絡先】 ☎102-0071

東京都千代田区富士見2-2-2東京三和ビル
503号

TEL : 03-3261-7855

FAX : 03-3261-9053

✉life@earth-ngo.jp

1日体験してみました!(by 取材チーム)



ポイント①

佐藤さんのミニ授業が始まる。感情を込めた語り口に、みんなの目の色が変わる。



ポイント②

細かい作業が必要になる工程! 時間を忘れて熱中しました。これが体験したスタッフの手元。



ポイント③

日本語の絵本がインドネシア語の物語に変わっていく!

ポイント④

おしゃべりしながら楽しくできました! 子どもたちが喜んでくれるといいな。



ポイント⑤

作った絵本は、インドネシアの子どもたちへ。いっぱい読んでね。



深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。

特集

こども・若者が想いを形にし、 社会のつくり手となるために

- 6 寄稿 こどものチカラを地域のチカラに
—『とさっ子タウン』『こうちこどもファンド』の取り組みから
◇畠中洋行
- 10 若者の社会参加を！
◇両角達平
- 13 大好きな気仙沼でやりたいことを実現した高校生のプロジェクト！
- 15 高校生の社会参加！ —制服プロジェクトの活動から
- 17 あすマネ 子どもを対象とした活動だから学校で活動したい！
～どうやって学校と接点をもったらいいの？～

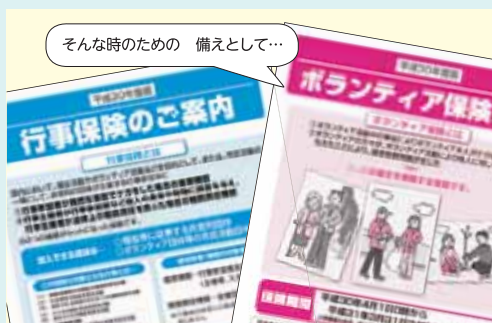
知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形やボランティアに一步ふみだすヒントを、
カラーページを使ってご紹介します。

- 1 思い立ったがボラ日 地球の友と歩む会／LIFE
- 22 つばやきブレイク vol.3 鬼は悪人なのか？ —桃太郎が犯した過ち
- 23 セルフヘルプという力 第15回 Spring ～性被害当事者が生きやすい社会をめざして
- 25 あなたのまちのキラッと☆ぼらせんナビ vol.16 法政大学多摩ボランティアセンター
- 26 いいもの みい～つけた！ vol.15 ESAアジア教育支援の会

もしもボランティア活動中に怪我をしたら… 怪我をさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910
FAX. 03-3268-8832
URL. <http://www.tokyo-fk.com/>

特集

こども・若者が想いを形にし、 社会のつくり手となるために



©こどもたちが運営するまち「とさつタウン」

こども・若者が自ら考え、その想いを形にすることで社会参加し、社会のつくり手となっていく——行動するこども・若者たちと、彼ら／彼女らに伴走する大人たちがいる。

こども・若者がチカラを発揮し、それをいかに地域や社会のチカラにしていくか。本特集では、実際に活動しているこども・若者や大人に生の声を聞いた。



『とさっ子タウン』集合写真。

寄稿

こどものチカラを地域のチカラに

——『とさっ子タウン』

『こうちこどもファンド』の取り組みから

畠中洋行

①『とさっ子タウン』のしくみ

高知県高知市では、「こどものチカラを信じよう！」の合い言葉のもと、こどもが主体となって地域やまちのことを考え実践する『とさっ子タウン』と『こうちこどもファンド』が行われています。『とさっ子タウン』は10年、『こうちこどもファンド』は7年を経過する中で、こどもたちや周りの大人の有り様や変化といったことについてレポートします。

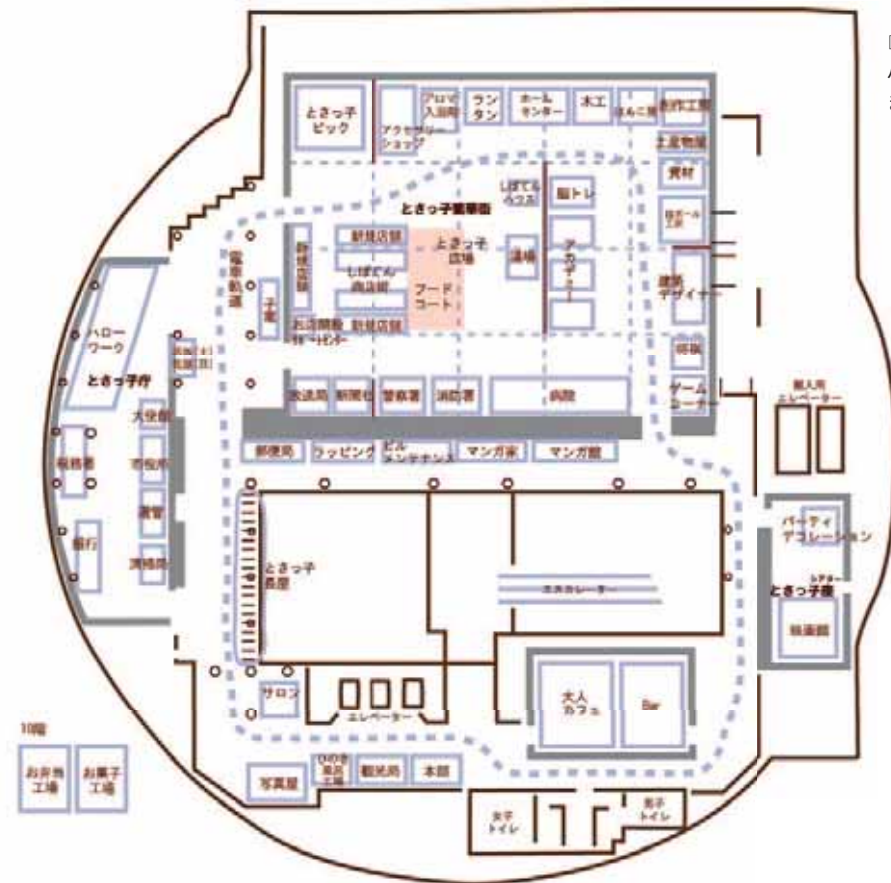
1.『とさっ子タウン』

『とさっ子タウン』は認定NPO法人NPO高知市民会議が呼びかけて組織した『とさっ子タウン』実行委員会などが主催し、2009年から始まりました。小4～中3のこどもたち約400人が、年に1回仮想のまちに集い、2日間かけてまちを運営する取り組みです。

こどもたちはハローワークでやってみたい仕事を選び、仕事をし(約50業種の専門家約100人がボランティアで参加)、働き終わったら銀行で給料(タウン内の通貨「トス」)をもらいます。給料をもらったら税務署で給料の15%分を所得税として支払うようになっています(税率は毎年初日に行われる議会により変更したりします)。

その後、再びハローワークで新たな仕事を選んだり、まちの中で飲食や買い物をしたり、遊んだりします。また、一定の職業経験を経て資金がたまれば、自分でお店を起業することもできます。さらに、市長選挙と議員選挙を隔年で行い、議会が開催されます。

『とさっ子タウン』内では、実行



『とさつ子タウン』2018年のレイアウト。
小学校4年生から中学校3年生までのこどもが
まちを運営する。高知市文化プラザにて開催。

1日目の終わりに議会で決まったことを報告。



委員やスタッフはこどもたちが悩んでいる時や困っている時に「どうしたの？」と声をかける以外は、こどもたちに任せることを基本としています。保護者もタウン内には入れません。

②『とさつ子タウン』にみるこどものチカラ

わずか2日間でも参加したこどもたちには変化が現れます。1日目の始まり時点では、まだ戸惑いがあり受動的な様子が見受けられますが、次第に、与えられたプログラムにアイデアを足したり、まちの中に不足していることを解決するために起業したり、議会で話し合ったりというように、こどもたち自らで考え行動に移す能動的な姿勢へと変化していきます。

企画・運営を担う「実行委員会」のメンバーは、高校生・大学生・大人で構成されています。10年継続することと、とさつ子タウン市民を経験したこどもたちが、高校生・大学生になり、実行委員や当日ボランティアスタッフという運営メンバーへと育ち、自らの経験を生かしてこどもたちに接しています。

県外の大学に進学しても、『とさつ子タウン』の時期には顔を出してく

れ、運営をサポートしてくれています。こうしてこどもから高校生・大学生・社会人へと育っていく彼女たちが、これからの高知を一層元気にしてくれると信じています。

2.『うちこどもファンド』にみるこどものチカラ

①『うちこどもファンド』の目的としくみ

「自分たちのまちを良くしたい」という、こどもたちの想いを実現し支援することを目的に、上限20万円までの範囲で活動に対する助成を行う『うちこどもファンド』が高知市長の肝いりで創設され、2012年4月よりスタートしました。高知市長がほぼ毎年『とさつ子タウン』を訪れ、生き生きと活動するこどもたちと触れ合う中から「こどものチカラ」の可能性を実感したことも、『うちこどもファンド』創設の動きを後押ししたと言えます。

②『うちこどもファンド』の特徴

高知市に在住または通学・通勤する18歳までの3人以上のグループで、サポートしてくれる大人が2名以上いるという条件を満たせば『うちこ



(右上) 公開審査会でのプレゼンテーションの様子。
(左上) 質問することも審査員。
(左) こども審査員の投票で助成決定。

こどもファンド』に申し込みができます。

助成は6月に開催される公開審査会の場で決定します。公開審査会では、①自分たちの考えたまちづくり活動の提案をプレゼンテーション、②審査員と質疑応答、③こども審査員によるシール投票を行い、過半数の票を獲得したら助成が決定します。

『こどもファンド』の特徴は、こどもたちが提案し、こどもたちが審査して選び、こどもたちが取り組みを実行するということにあります。

こども審査員は小・中・高校生で構成され、任期は1年。公開審査会でのこども審査員はとて真剣で時には厳しい質問も。「質問してあげないと、応募した人たちの想いを皆に伝えることができないから」と語るように、それぞれの活動を応援したいというこども審査員の想いを感じることが出来ます。公開審査会が、応募したこどもたち、審査するこどもたち、さらには大人の参加者にとって学びの場にもなっています。

③『こどもファンド』助成を受けた取り組み

2012年～2018年の7年

間で延べ53団体が助成を受けました。地域の商店街を元気にする、地域に現存する史跡・お店・郷土料理等地域の魅力を再発見し伝える、防災に関するものなどテーマは様々。その中から、いくつかの取り組みを紹介します。

■住宅団地の空地で

野菜を作り地域で交流

市郊外に立地する住宅団地の一角、宅地として使われていない土地を借りて、この団地に住む小・中学校生たちが大人に教わりながら野菜作りに挑戦。収穫した野菜を、いつも公園掃除をしてくれている老人クラブの皆さんや一人暮らしの高齢者にプレゼント。また、収穫した野菜を使って料理をし、老人クラブの皆さんを招待して交流会を行うなど、こどもと地域の人たちが「知ってるだけの人」から「声のかけあえる身近な人」になってきています。

■地域の人と連携した防災啓発活動

南海トラフ地震が起きた場合に、校区の60%以上が津波のために浸水する危険のある中学校の生徒会メンバーを中心にした取り組み。避難所MAP作りや即興芝居を創作し、保育所や小学校、老人ホーム、地区社



若者の社会参加を！

両角達平

「プロガー系北欧研究者たっぺい」

「スウェーデンの若者政策専門家」両角達平さんの名前を検索すると、そんなキーワードが出てくる。研究領域は、若者政策、ユースワーク、若者の社会参加、シティズンシップ教育、民主主義、市民社会、スウェーデン社会、欧州の若者政策……と幅広い。

大学生時代に学生団体サークル YEC(若者エンパワメント委員会)を立ち上げ、スウェーデンのストックホルム大学で若者政策について学んできた両角さんに、若者の社会参加についてお話をうかがった。

YEC立ち上げの経緯は？ ——意思決定と実現の場を

僕の出身は、長野県茅野市です。茅野駅前のビル内には、「CHUKO らんどチノチノ(以下、チノチノ)」という中高生しか入れないスペースがあります。チノチノはダンスルームやスタジオ、学習室等があり、子ども運営委員会が企画・運営しています。バスや電車の待ち時間に利用

されていました。

その後、静岡県立大学の国際関係学部に進学しました。静岡にはチノチノのような場所はなかったため、若者が集まる場をつくりたいと考えました。そこで、青少年自立支援などを専門としている津富宏教授(つとみひろ)に相談し、立ち上げたのが YEC。2009年、大学2年生の時でした。「若者の社会参画を活性化し、若者が社会の力となっている状態を目指す静岡の学生サークル」として、まずは、中高生の放課後活動を大学生が応援するというプロジェクトを行うことになりました。

自分でアイデアを出して実現する、そんな意思決定の場がいまの中高生にはないと思っていたので、中高生とやりたいことを実現するためのワークショップを行いました。自分たちで意思決定し、実現する過程は、エンパワメントにつながると考えました。

2010年に行ったプロジェクトは、「多世代ぶっちゃけトーク」学校の枠を越えた「文化祭」、富士山

子どもの国を貸し切った「リアル鬼ごっこ」でした。

スウェーデンで若者政策を研究

YECの活動を進めるために勉強をするなか、スウェーデンの若者政策への関心が高まりました。そして、2010年5月、スウェーデンへのスタディツアーに参加し、同世代の若者と話しました。若者たちが「民主主義」という言葉をよく使うことや、投票率が高いことに衝撃を受けました。

そして、2011年、大学を休学してストックホルム大学のこども・若者学部で留学します。学生生活を送る間に、ドイツの若者政策の国際 NGO、Youth Policy Press インターナショナルも経験しました。静岡県立大学を卒業した半年後にストックホルム大学院に入学し、そこから東京大学教育学研究科教育内容開発コースに留学、今春から文教大学で研究員、そして駒澤大学で非常勤講師をして「若者の居場所と参加」と



YECの学生とスウェーデン視察時に、いじめ撲滅を掲げる NGO「Friends」を訪問した時のもの。



スウェーデンのヨーテボリ市にあるコミュニティセンターを視察。

いう授業で教えています。

ユースワークとは？

スウェーデンで学ぶきっかけとなったのが、「ユースワーク」という言葉です。ユースワークとは、YECの活動と同じで、若者が自分たちのやり方で自己実現や表現活動ができるように支援すること。ユースワークは「教育」とは限らず、余暇活動や楽しみとも結びついています。

スウェーデンでは、ユースセンターを拠点として、若者が組織活動をしています。難民支援、政党の青年部のほか、ゲームの同好会などもあり、申請すれば国や地方自治体から助成金も出ます。政治や趣味の活動にもお金が出るなんて、この国はおかしいぞと最初は思いました。

北欧は、日本よりはるかに多様です。多様な社会で暮らしていくために、意思決定の場には、障がいのある人、セクシュアルマイノリティ、高齢者、外国人、こども、若者などがいるのが前提となります。日本でもそのような場が見られるようになりましたが、他のマイノリティと同じく、こどもや若者の「席」は設けられてないことが多いのではないのでしょうか。

若者と関わるうえで大切なことは？

若者を社会参加の場に出したいけれど、どうしたらいいのかわからない、うまくいかないーそんな課題を抱える大人の方々に会おうことがあります。もしかししたら、そこには若者をコントロールしようとする大人のチカラが働いているのかもしれない。

そうした大人の方々にお伝えしていることは、若者のために何かしようとか、若者の活動を促そうとする前に、ご自身が社会に関心を持っているか、社会参加しているかを考えていただき、そうでない場合にはまずは自身が活動していただきたいということ。スウェーデンでは、大人のグループも多く存在します。3人集まればグループとして認められ、生涯学習センターのような施設を利用でき、勉強会や市民活動をしています。行動する大人たちが見えていれば、若者自身も考えたり活動したりしやすくなると思います。

とはいえ、若者の活動には大人のサポートが必要なことも多くあります。北欧などヨーロッパには、若者の自己実現や社会参加を支援する

ユースワーカーがいます。ユースワーカーの良し悪しはジャッジできませんが、若者とうまくいっているユースワーカーは、若者と「同じ言語」で話しています。YECは、若者が若者を支援しているの、同じ目線で話すができますが、大人が自分の価値観で話してしまうと、若者は疲れてしまう。とくに日本人は違いを感じ取るのに敏感なので、若者が受け入れなくなってしまう。また、支援者・被支援者という関係を乗り越えて話すことも必要です。

しかし、若者に寄り添う気持ちがあっても、「同じ言語」で話すことが得意でないという大人もいるでしょう。その場合は、若者と同じ言語を持つ「媒介者」を探せばいいのです。

日本において、若者がユースワーク的な動きをしている事例

たとえば、杉並区にあるゆう杉並、世田谷区の野毛青少年交流センター、文京区にあるNPO法人カタリバが運営する「youth」は日本には珍しい中高生のためのユースセンターといえるでしょう。また、最近では若者の地域への社会参加のチャンネルとして「ユースカウシル」が着



両角達平さん。ストックホルムのレストランにて。

目されていますが、愛知県新城市の若者議会が先進事例として取り上げられています。また京都でも、「ユースカウンシル」を立ち上げる動きがあるようです。

政府も、若者支援は就労支援だけでは限界があることに気づいていきます。自立とは、経済的なものだけではなく、精神的自立もあります。それは学校や職場で育まれるほか、余暇活動やスポーツなど、さまざまな経験を通じていくものです。ただし、日本の場合は、北欧では当たり前の政治的な活動がタブー視されてしまうのが残念ですね。

若者の社会参加を すすめるために

若者の社会参加を支援するような活動をしているのに、彼ら・彼女らにリーチしていない状況であるとしたら、何がいけないのか当事者に聴くのが一番いいと思います。たとえば、若者の活動に助成したければ、若者のアンバサダー（大使）をおき、アンバサダーとともに運営委員会をつくる。アンバサダーは、若者グループに情報を直接、提供することができます。

実は、日本の10歳代投票率は20歳

代前半より高いのです。一般的に、若いときに高いと、下がることはあまりありません。この世代のボランティア活動者も増えています。若者の社会参加の意識は高いといえるでしょう。こうした若者たちの活動に対し、大人がいかに関わり添っていくかは、前述のとおりです。

今、僕は駒澤大学では「若者の居場所と参加」という授業を受け持っています。受講している学生は、非常に意識が高いです。僕は北欧で学んできましたが、北欧のやり方を日本の若者にやらせようとは思っていません。自分たちのやり方でやりたいことを実現し、社会のつくり手になるべく活動することに伴走していきたいと思っています。

読者へのメッセージ

—— 市民社会を大きくしよう！

若者の社会参加というテーマよりも、大きな話となってしまいが……。

国家、市場、家族の間にあって、その3つの課題を補うものが市民による自発的活動です。日本ではその活動が小さく、社会を支えきれず出血をしているように感じます。傷口に絆創膏を貼るような対処療法ではなく、そもそも転ばないようにするといった根本的な社会づくりをしなくてはならないと思います。

市民の自発的活動で市民社会は育つ。一緒に、市民社会を大きくしていきたいでしょう。

両角達平（もろずみ・たつへい）

88年、長野県出身。文教大学生生活科学研究員。駒澤大学非常勤講師。ストックホルム大学教育学部（国際比較教育専攻）修士。研究領域：若者政策、ユースワーク、若者の社会参加、シティズンシップ教育、民主主義、市民社会、スウェーデン社会、欧州の若者政策。

2009年、静岡にて若者の社会参加を支援する活動を開始。大学生による中高生の余暇活動支援を軸とし、啓発活動などにも取り組み若者の社会参加を促すユースワーク活動をする。

2012年からスウェーデンの首都ストックホルムに留学。視察コーディネーターや翻訳、記事執筆、独自調査に携わる。ストックホルム大学教育学部（国際比較教育専攻）修士課程を修了。ヨーロッパで訪問した団体数は70以上。



大好きな気仙沼でやりたいことを

実現した高校生のプロジェクト！

東日本大震災から7年「気仙沼のために活動したい」という地域の担い手に大人も子どもも関係なかった。編集部が夏休みを利用して訪れた宮城県気仙沼市での出会いから、本取材につながった。

●「何かやりたい」を実現する

一般社団法人まるオフィスは、宮城県気仙沼市の唐桑半島に拠点を構える、まちづくりの会社である。東日本大震災を機に、気仙沼を訪れ、移住した若者と、地域の若者たちが2015年の春に立ち上げた。

まるオフィスは、自分たちが「地域の仕掛人」となり、気仙沼に関わる若者の活動人口を増やすため活動している。今回は、まるオフィス等のNPOが協働し企画・運営している「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード（以下、マイプロアワード）」を取材した。

マイプロアワードは、「気仙沼のために何かしたい」という高校生

が集い、自らが実行する地域活性化プロジェクト（マイプロジェクト）を練り上げ、実践する実践塾だ。

高校生が自分にできるプロジェクトを作り上げ、実行し、最後には市全体にプレゼンテーションを行う5か月間のプログラムである。マイプロアワードに参加している佐藤菜摘さん、伊藤夕妃さんにお話を伺った。2人とも気仙沼高校の2年生だ。

●「何かできることがあるんじゃないか」

佐藤菜摘さんが地域活動に参加するきっかけを持ったのは昨年、カリフォルニアで参加した地域の課題解決策を考えるプログラム。多大な刺激を受け、帰国すると、「気仙沼のために何かできることがあるんじゃないか」と感じるようになったという。

しかし、「やりたいことを素直にやる」時間も場所もなかった。

そんな時にマイプロアワードと出会った。ちなみに、好きな芸能人は竹内涼真。

●「あれ？自分の地域ってもしかしておもしろいかも？」

伊藤夕妃さんは「最初は地元が大嫌いでした。大きい建物とかキラキラとした華やかなものがない地元が嫌いでした」と話してくれた。そんな彼女が地域活動に興味を持ったのが震災から3年後の小学6年生の時だった。

まるオフィスが行った地域のまち歩き発表会に参加した伊藤さんは、「あれ？自分の地域ってもしかしておもしろいかも？」と感じるようになった。その後、マイプロアワードを紹介された。好きな芸能人は嵐。

●大好きな地域のために

——マイプロアワードでどんな活動をしていますか？

菜摘 テーマは「高校生の語り部プロジェクト」です。今年の3月11日にあるイベントに参加し、自分の震災の経験を話す機会があったのですが、1人の方から「あっ、今日が3月11日か」という反応が返ってきました。昔の私なら、「悲しいな」で終

わっていたと思いますが、今は「何かやりたい」と考えることができ、自分で震災のことを伝えるプロジェクトを始めてみようと思いました。今年の夏休みには、気仙沼で2回、語り部をやりました。震災から7年、「つらい」の一言では語りつくせないほどつらい経験をしましたが、支援に対する感謝も伝えました。

語り部というと、年配の方のイメージがあって、「自分の話をきいてくれるのかな」と不安もあるけど、子どもなりの想いや考えを伝えることを意識しています。中には「友達にも伝えるよ」とか「自分の子どもにも話してほしい」など言ってくれる人もいます。



気仙沼を変えたい！気仙沼が好き！
その気持ちで皆が手を取り合う。



菜摘さん(左)「気仙沼に住んでいる身としては、やっぱり海とか、いろんな魅力を見に来てほしいです」
夕妃さん「海産物がおいしいです。私はカツオのたたきが好きです!」



夕妃 テーマは「関係人口を増やそう」です。自分自身がたくさんの人と出会うことができたから、マイプロジェクトとか、地域の活動につながっていると思っています。

地域内外の人たちとも出会うことで、自分自身を豊かにできるんだよっていうことをたくさんの人と共に

有したいと思ったのも、テーマ設定のきっかけの一つです。具体的には、地域の農家さんとか漁師さんなどに話を聞いて、どうして地元に住もうと思ったかといったことを、地域外の人に発信したりしています。

——今後の目標を教えてください。

菜摘 日に日に震災の記憶が薄れているように感じますが、そういう意味では、「自分の感じたありのままの感情」を多くの人に伝えたいと思っています。つらい経験をしたので、ネガティブな表現になってしまいうこともありますが、それでも自分の経験を口で伝えることが大事だなと思っています。

夕妃 震災があったことで、外から来て支援をしてくれた人がたくさんいます。お互いを助け合う雰囲気を作り、その文化を守り続けてくれる人たちに恩返しをしたいです。それを言葉にすることができたのは最近ですが、地域に何かを遺す活動をしている大人に出会えたのは本当に良かったと思います。今後は自分があるという存在になれたらと思います。

——同世代の高校生たちにメッセージ

ジをお願いします。

菜摘 私も前まで、同年代の活躍を見て「自分はいいや」とか考えることもありましたが、ただ、「一言」や「りたい!」と言うだけで周りの大人は必ず助けてくれます。自分の気持ちや、「やりたい!」となかなか言い出せないとは思いますが、一言声を出すだけで、周りの大人は必ず違う世界に連れて行ってくれます。勇気を出してもらいたいと思います。

夕妃 正直言うと、「地域貢献を積極的にやっつていこう」と思う高校生は本当に少なく、周りから「何やってんの?」と理解してもらえないこともあるかと思っています。でも、教科書に載っていないことが学べるのが一番の魅力だと思います。教科書から学ぶことももちろんありますが、たくさんの人と会って話すっていうのを、多くの高校生と共有したいです。

——周りの大人たちはどのような存在ですか?

菜摘 周りの大人と共通しているのは、地域を変えたいということと、気仙沼が大好きだということだと思います。たとえ考え方が違ってても、

根本的な気持ちは一緒だと思うので、大人たちをとて信頼しています。

夕妃 自分たち高校生がやりたいと言ったことに対して、たくさんの方が手を差し伸べたり、相談したりしてくれる場が地域にあるっていうのは感謝しかありません。高校生には行動するのも考えるのも限界があると思います。だから、そのチャンスを与えてくれる大人がいるっていうのはありがたいって日々思います。

気仙沼では、高校生と大人たちが強い絆で結ばれていた。

まるオフィスの矢野さんは、「私たち高校生と10歳も離れているから、最初はど話していいかわからなかったけど、やっぱり話してみれば通じ合えますね。彼女たちからも刺激をもらいます。私たちもだんだんと考えが固くなると思います(笑)。若い子の方が新しい考えが出てきて、勉強させてもらうことが多いです」と語ってくれた。

大好きな地域のために貢献する。高校生と大人が手を繋いで作っていく気仙沼の未来はもっとキラキラしているだろう。



制服を着て渋谷にて募金活動をする椿山鼓ノ子さん(写真右)。



高校生の社会参加！

——制服プロジェクトの活動から

「制服プロジェクト(以下、制プロ)」という高校生がつくったグループがある。制プロを立ち上げ、代表を務める椿山鼓ノ子さんにインタビューした。

●制プロ誕生のきっかけ

私の通う高校では、1年から2年の夏までにボランティアに関する研究をして論文を提出するという課題があります。私は、ホームレスの方々の支援をテーマに選びましたが、高校生ができる活動は限られることがわかりました。そこで、高校生ができる支援方法として、論文の中で募金活動を提案しました。それが昨年の夏です。

●制服を着て募金活動を

最初の募金活動は昨年11月。初めてなのでどうしたらよいかわからず、いろいろ調べる中で「ユニセフハンド・イン・ハンド募金」¹を知りました。これは、キャンペーン期間中な

らだれでも参加できるユニセフの募金活動です。募金箱やポスターなどの活動ツールが支給されるので、準備は少なくて済みました。

周囲の生徒に声をかけ、5人で学校がある渋谷区にて募金活動を行いました。その際に大変だったのは、道路使用許可を取るために警察へ数回行ったことでした。

制服で活動したのは、自分たちにとっては責任感、そして街頭の人びとに対しては清潔感や信頼感をアピールしたかったからです。

●募金活動と活動による広がり

学校で募金活動について発表したら、「やりたい！」という声が挙がり、メンバーが増加。そこで、今年4月、あしなが学生募金のボランティアスタッフとして活動しました。自分たちと世代の近い人の支援なので、メンバーの関心も高まりました。

自分たちで初めて企画したのが6月です。これまでの活動で、地元で行うことや、同世代の人の支援を、



複数の高校の生徒で行った、ユニセフの募金活動。

という気持ちが高まり、渋谷区社会福祉協議会（以下、社協）に相談して、「こどもテーブル活動助成」^{*2}に寄付するための街頭募金を行いました。こども食堂の間接的な支援をするにあたり、社協の紹介でこども食堂を訪ねました。社協からは歳末たすけあい募金を一緒に、というお話もいただいています。実績を積み、こういう機会が増えたらいいと思います。

●大人の協力と制プロへの想い

学校も社協も、活動については見守りというスタンスです。メンバーの親は活動現場に来て募金したり、道路使用許可申請に行ってくれたり（1回で許可が出ました）、必要に応じて手を差し伸べてくれます。

募金活動を通じて、大人と接する機会が増え、大人の世界も完璧ではないと感じましたし、逆に高校生だからこそできることがあると実感しています。

現在、メンバーのほとんどは3年生。後輩たちが活動を引き継いでくられて、ゆくゆくは、制プロの活動が他の地域にも広まっていったら嬉しいです。

*1 1979年の国際児童年に始まり、毎年11月～12月をハンド・イン・ハンド募金月間としている。

<https://www.unicef.or.jp/cooperate/handinhand/>

*2 こどもたちに食事の提供や居場所、学習等の場を提供する「こどもテーブル」活動を行う団体に助成を行う。

<https://www.shibuyashakyo.or.jp/table/josei.html>



制プロでつくったポスター。

* 本日のご相談 *

子どもを対象とした活動だから学校で活動したい！ ～どうやって学校と接点をもったらいいの？～

ダンスが得意な仲間と子どもを対象にダンスを教える活動をしたいと考えています。多世代・多文化の交流をしたり、仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを学んでもらいたいと考えています。

学校で活動をしたいと地域の学校に朝一で連絡をしましたが、会って話をきいてもらうのも難しいとの返事でした。

どうしたら学校と接点をもてるのでしょうか。

放課後NPO アフタースクールの場合

今回のご相談のように「学校に接点をもちたい」と思っている団体は少なくありません。そこで、今までに18の学校でアフタースクールを開校してきたNPO法人放課後NPOアフタースクールの事務局長・島村友紀さんにお話をうかがいました。

● キーパーソンの出会いと 公民館での活動の評価

代表の平岩に子どもが生まれ、今まで「他人事だった子どもの連れ去り事件が自分事になった」。それが活動のきっかけです。

子どもにとっていろいろなことができる放課後は「チャンスの時間」でありながら「リスクの時間帯」でもあるのです。



お話をうかがった島村さん。

「不安」を「安心」に、さらに「希望」に変えていくことが必要だと感じ放課後活動に乗り出します。

活動を開始した当初は、学校に企画を持ち込んでも思うような反応は得られませんでした。活動に参加してもらおう子どもを集めるために、公園でチラシを配ったりと、思いつくことは何でもしました。公園での広報活動は、団体の想いとは真逆の「不審者扱い！それはそうですよね（笑）」。

学校での活動を目指すも道のりが険しそうだったので、公民館で活動を始めます。

公民館の活動も参加者集めに苦勞しました。参加者が増えないまま、活動日は近づきます。それでも粘り強く、地域で広報活動をしていると民生委員の方が「何しているの？」と声をかけてくれ、当日、2人の子どもを連れて来てくれました。学校や地域、子どもたちと「つながりを持つている人」、最初のキーパーソンとの出会いです。

公民館では、プロの料理人から料理を習うプログラムを企画しました。料理のプログラムというと、楽しみに料理するイメージをされるかもしれませんが、職人気質の料理人から料理を習うことは、まさに「弟子入り」です。「プロの技」「プロの

仕事」を見ることで、「凄い！」と子どもたちの表情や意識が変わっていきます。その変化や成長を目の当たりにした保護者や地域の方々から評価され、参加と問い合わせ人数が増えるようになりました。

そしてキーパーソン2人目の出会いにつながります。参加者のお一人が、世田谷区で放課後活動をされている方で、「学校の放課後で活動してみない？」と学校への入り口をつくってくれました。

放課後の活動は、日中の授業ほど制約が厳しくなく、比較的、自由な活動が許されていることが魅力でした。その後、放課後活動に力をい

れる私立の学校でアフタースクールを開始し、一つひとつ活動を積み重ねてきました。

そして、政府の学校を活用した全国的な放課後対策の発表が追い風になり、公立学校での活動もスタートさせることになりました。

公民館の活動から約10年が経過していました。

●子どもを主語に語る

政府が放課後対策に力を入れた時期は、NPOだけではなく、営利企業の参入のきっかけにもなりました。

企業が、資金力で活動拠点の数



アフタースクールによる放課後活動の様子。

を増やすことで課題解決に乗り出す中、「地域の力を借りながら作る楽しい放課後」を提供するには何をすべきか、団体内で話し合いを重ねました。子どもとつながりを持つている人たちとネットワークを作り、相手との目線を合わせ、「子どもを主語」にして、目的を語り、目標を共にする努力、働きかけをしました。活動を説明するときには、つい「自分たちができること」、「自分たちが得意なこと」を主張しがちですが、「子どもを主語」にして、子どもにどんなふう to 成長してもらいたいのかを丁寧に説明し、理解してもらい目的を共有します。もちろん、信頼を得るためには、団体ができること、強み、実績を伝えることも大切です。「子どもを主語」にして語れば、「必ずだれかが共感してくれる」とは忘れないでいてほしいです。

●つながるときには

学校にアポイントを取るときも忙しい時期、時間帯は避けて授業が終わった夕方の時間等を狙います。できれば事前に学校とつながりある方から担当の先生を紹介してもらうと話が進みやすいです。

当たり前のことですが、学校（その場）にあるルールを理解して守る

ことは継続的な信頼を得るためにも重要です。例えば、清潔感のある服装や身だしなみに気を付け、打ち合わせが有意義であることを意識していただけるように訪問時には、企画書や活動内容が短時間で理解してもらえるような動画、学校が求めているであろう情報を用意します。また、その学校の教育方針や理念を大切にプログラム化します。

企画も複数だし、1回や2回不採用でも諦めないことが大切です。すぐに芽がでなくとも、過去にまいた種が先々に芽となり花になることがありますから。

つながるためには粘り強く、いろいろと気を配っています。

●目的を見失わない

活動を積み重ねると、実は学校と組むのは一番ハードルが高いことだと気がつきます。なぜなら、先生は、授業の準備や部活動などなど本当に忙しい。学習指導要領にしたがってカリキュラムは組まれており、自由にできる時間は限られています。その隙間に多くの団体からの多くの企画が持ち込まれます。競争率は高いですね。

「学校とつながる、学校で活動することで目的が達成できているのか

な？」と団体が自問自答しながら、「子どもたちへのメリット」「団体の目的」を見失わないことが一番大切なことかもしれません。

●メッセージ

学校は放課後からが入りやすい。子どもを主語にして語れば必ず誰かが共感してくれます。諦めず活動をし続けてみてください！

スカイ学校支援ネットワークセンターの場合

続いては、「元教員だから知っている学校と接点をもつコツ」について、NPO法人スカイ学校支援ネットワークセンター（以下スカイ）の理事長・森本芳男さん、事務局長・長谷川ミチルさんにお話をうかがいました。スカイは子どもたちのためにNPOや地域住民、企業などと学校をつなぐ活動をしています。

●現場の先生からの悲鳴

これまでの学校教育は「学校の教師が行うもの」と考えられていました。しかし、06年（平成18年）に教育基本法が50年ぶりに改訂となり「学校・家庭・地域住民等は、教育

における責任・連帯協力が必要」と明記。続いて、08年（平成20年）には、学習指導要領が大幅に改訂され「ゆとりと生きる力」を育むために、総合的な学習の時間や学校週二日制などが導入されました。この「生きる力」を育むためには、各学校は、地域の人的・物的資源の活用や社会教育等との連携により「社会に開かれた学校」の実現を図ることが求められました。そのため、現場の先生が、今まで扱ったことのない「福祉・環境・キャリア・消費者・情報…」などを教えなければいけなくなり、現場からはすぐに悲鳴があがりました。これらがきっかけとなり、学校は、「地域の力を借りながら協力して教育を行って」いくことが必要となりました。

文部科学省は、学校と地域をつなぐための学校地域本部事業をスタートし、「コーディネート」を配置しますが、うまくいきません。

なぜなら「地域の力を借りる」と言っても学校の先生は、コーディネーターに何を頼めばいいのかわかりませんし、学校教育のノウハウがない人に企画提案されても受け入れ活用する余力はありません。

一方、地域や企業の人たちは学校や子どもたちの教育に貢献するこ

とを希望していますが、学校のニーズを知ることが難しく、教育に関わるノウハウがありません。

そこで墨田区教育委員会では、学校と地域・企業等が連携し、継続的に教育の支援活動を行えるようにネットワークを作ったのです。その後、地域、企業、区外へ転動した先生からの要望も高まり、全国に活動をひろげることができるようNPO法人化しました。

●接点をつくるために

学校と接点をつくるための準備は大きく分けて次の4点です。

- ① ニーズをキャッチする、② 企画・資料をつくる、③ アポイントをとる、④ キーパーソンを見つける。
- ① 学校の先生に直接、会える機会をつくりましょう。例えば、スカイの事業「出前講座」に見学を申込み、休憩時間等に「今、どんなことが子どもたちに必要ですか？」など先生と仲良くなり、学校や先生のニーズをキャッチします。この時に強引に自分や企画を売り込んだりはNGです。

② 「学習指導要領に沿ったねらい」「授業と提案する内容がどう結びつくのか」を定め企画をつくり、忙しい先生では集めきれない資料や

実物を用意し、教育課程の中で行う意味を示すことです。

学校の先生が苦手としている分野や先生からのニーズが高いもの、参加型のメニュー（内容）などに対応することで、授業として採用される確率が高くなります。

スカイは、授業メニューを300以上もっていますが、メニューの作成時には、企画者に「学校教育（学習指導要領）」に沿う内容になるようにアドバイスをします。

ひな型は、タイトル・関連教科・ねらい・対象・講師・形式（講義型・



長谷川さん(右)と森本さん。

参加型」・内容・費用（公立学校では、基本的には無料でおこなうこととなりますが、内容によっては、予算がないか検討します）・申し込み方法や授業風景がわかるよう写真や挿絵をいれA4用紙1枚に「内容が1時間でどう展開され、何を学べるか」をまとめます。余白を上手に使い、文字ばかりにならないように工夫し、対象学年によって、文章の表現や使用する言葉も易しくするのがコツです。

③アポイント「地域担当の先生」宛てに、夕方16時以降の授業が終わった時間帯や夏休みを狙います。なかなか捕まらないときは「一言」を残してもらいましょう。

次年度の計画は1月には決まっているため、次年度に向けての企画は12月には提案する必要があるでしょう。

④キーパーソンは、学校に接点をもっている人とながることです。例えば、スカイに相談してもらうのもいいです（すべての相談を学校へつなげられるわけではありませんが、一緒に考えさせていただきます）東京ボランティア・市民活動センターや地域のボランティアセンターに相談するのもいいでしょう。また、地域の育成委員会やPTAと

コンタクトをとるのもいいかもしれません。

学校は特有の文化やルールがあるため、キーパーソンをみつけ、接点をつくってもらうことをお勧めします。

また、学校での事業実施の打ち合わせは念入りにすることが大切です。先生は、子どもたちがどこでどんな反応をするかが予測できます。その反応をどう捉え展開させるか、先生の率直な感想をうかがい、講師（活動者）だけではまともきれないなどの場合には、先生にどんな場面でも、どんなことをお願いしたいのかなど役割分担を明確にし、遠慮なく授業に協力してもらうことが成功のカギです。

●平成30年度の改訂

改訂が目指すものは「主体的に考えまとめ発表する力」です。子どもたちが、どのように考えて道筋を立てその結果にたどりついたのか、プロセスが大切になります。

出前授業のメニューで例をあげると道徳の授業で「漫才でいじめ」について考えるメニューがあります。「漫才を通して言葉の持つ力」を考えさせる内容になっていました。子どもたちは、漫才の中で使わ

れた言葉を思い出し、使っていない言葉や相手を傷つけない笑について考え「相手の立場」に立って考えることをしました。一方的に「いじめ」はダメだと言われるより、どうして「いじめ」はダメなのか主体的に学んだはずです。

団体やその人の強みを生かし、ユニークな内容も授業で採用されることは十分にあります。もちろん、授業は、年間の指導内容・時間数が決まっており、そこに入るのは狭き

◆学校と接点をもつための5つのポイント◆

- ① 団体が学校で何をしたいか明確にしよう。
- ② 学校で活動している団体に相談してみよう。
- ③ 地域で活動の理解者・応援者を増やそう。
- ④ 地域に開放されている「学校公開」などに行ってみよう。
- ⑤ 学習指導要領を読んで企画を考えてみよう。

東京ボランティア・市民活動センターの相談

東京ボランティア・市民活動センターでは、NPO、ボランティアグループからの設立・運営などのご相談をお受けしています。ぜひ、お電話ください。

TEL:03-3235-1171

門です。しかし、学校は地域の力を必要としていますから、学校の文化を理解しながら団体の強みを発揮してください。

●メッセージ

先生と会うチャンスを捕まえて、直接話し、仲良くスタートさせましょう。

（安井忍 相談担当）
（秋池智子 編集部）

読者の声 ~本誌355号より~

読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆特集／自己表現とエンパワメントの自己表現

・ 個々人の表現をどう伝えるか、どう広めていくかの熱意や工夫がとても伝わってくる熱いお話でした。

・ ソケリツサ、興味深く読みました。ホームをレスしたメンバーを、かわいそうな存在にした福祉目線ではなく、アイトに徹するアオキさん、非常に賛成です。レインボープライドは当事者サイドの想いが知れてよかったです。

◆思い立ったがバラ日／第3こびあクラブ

・ 障害を持つ子達は、「昔〇〇したよな」という共通体験を得る事に少しハードルがあるように思います。そのハードルを、こびあクラブのような団体や人々が取り払っていった、いつかそんな差もなくなればいいと思いました。

◆セルフヘルプという力／若年発症パーキンソン病患者の「きぼうの会」
・ IT時代になっても、生で相談して共有、解決できる安心感というのは絶対にあるだろうと感じました。パー

キンソン病の知見から便利なソフトや仕組みが作られないものかと思えます。

・ 「セルフヘルプ」という考え方は、難病患者さんに限らず、誰でもが身につけてゆくべきバイバル力とも考えられるなあ…。

◆いいものみいつけた！／

難民自立支援ネットワーク (REN)

・ ホームページ拝見しました。デザインも完成度もすばらしい作品ですね。

◆地域の居場所ってなに？

・ 幼い頃には隣の家の人とあれだけ楽しく過ごせたのに、なぜ今はこうも距離があるのか、そんなコミュニケーションはどうすれば作れるのだろうかと感じました。

・ 自分の場合、独りになる場所も必要。なので、濃密なつながりよりは、淡いつきあいのできる居場所が居心地いいかも。

このほかにもたくさんのご感想をいただきました。ありがとうございました。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<http://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室 会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料
※会議室AB通し(80人)
貸出機材 印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター 他
申込み 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

火曜日～土曜日: 9時～21時 / 日曜日: 9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b)
飯田橋駅下車

ネットワークは、
ボランティア・市民活動を広げ、
応援する情報誌です！

【次回予告】2018年11月下旬発行予定

特集 **大人の学びを支える**

(仮題)

発行人 山崎美貴子

編集委員 五十嵐美奈(興望館)
上杉貴雅(オレンジフラッグ)
齋藤啓子(武蔵野美術大学 造形学部教授)
シュレ大学 社会学ゼミ(NPO法人東京シュレ大学)
服部篤子(社会起業家研究ネットワーク)
平野 泉(立教大学共生社会研究センター)
まつばらけい(フリーライター)
渡戸一郎(明星大学名誉教授)

編集・発行: 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050
E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷: 株式会社 美巧社

デザイン: 東京ボランティア・市民活動センター / 株式会社 美巧社
表紙イラスト: フローラル信子

2018年9月20日発行(通巻No.356)
ISBN 978-4-909393-07-4 C2036
400円(消費税込)

本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。





『おかやま桃太郎ものがたり 吉備津彦と温羅』
阿村礼子 作・夏目尚吾 絵／岡山市



桃太郎が成敗した鬼は、実は善人だった。私の周囲には、そのことを知っている人はいない。私自身、『桃太郎』の原話とされる物語を知ったのは昨年で、鬼の首を埋めたといわれる、御釜殿がある吉備津神社を訪れたことがきっかけだった。

勇敢で正義感が強い桃太郎（吉備津彦）が、島に渡り人び

鬼は悪人なのか？ — 桃太郎が犯した過ち

とを苦しめている鬼を一網打尽にする勸善懲惡物語は、戦時中にはプロパガンダ（特定の思想を押しつけるための宣伝。特に、政治的意図に基づくもの）として利用されたと聞いている。桃太郎のストーリーを検索すると、相も変わらず降参した鬼が人びとから奪った財宝を差し出し、桃太郎が持ち主に返して一件落着、というラストを迎えている。

桃太郎が成敗した「鬼」は温羅という、百濟からやってきた王子だった。

温羅は、隣国との闘いに敗れ吉備の国に逃れてきたものの、鬼と間違われて山に追われる。子どもを助けたことをきっかけに、少しずつ人びとの信頼を得て、やがては妻をめぐり、ようやく幸せを手にした温羅。しかし、よそ者であることや体の大きさ、能力の高さ、人気ぶりがたたったのか、温羅の悪いうわさが広がった。

どの角度から見ると、人は敵にも味方にもなり、救世主にも悪魔にもなる。

少し視線をずらせば、善人の側面が見えたはずなのに、桃太郎は人のうわさだけで温羅を討ちに出かけてしまった。

数年後、夢の中に現れた温羅に促され、桃太郎は温羅を知る人たちに確かめに行く。真実を知り、自分の行いを激しく悔いる桃太郎に、温羅の声が響いた。

「お前が俺を討ったのは、吉備の国の平

和を守るためだろう。俺もお前と同じくらい、この国の人びとの幸せを願っていた。」

そう言つて、温羅は桃太郎を赦すのだ。桃太郎は自分の行いを悔い、その生涯を吉備の国のために捧げた。

桃太郎伝説の原話は、単なる鬼退治よりも、よりたくさんの方を私たちに教えてくれる。なぜ、元の話に戻さないのだろうか。

残念なことに、平成30年7月豪雨では、インターネットを中心に岡山県でもデマ情報が出てしまった。しかし、デマのツイートを引用して「これは嘘情報です」「このツイートはデマ情報です！ 拡散しないでください！」という画像を添付する市民らが現れた。

吉備の国の人たちを混乱に陥らせないために、そして、現代の桃太郎が再び過ちを犯さないように立ち上がった市民の存在を心強く思う。

（秋池智子）



セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

「性被害当事者が生きやすい社会をめざして」

第15回 一般社団法人 Spring

一般社団法人Springは性被害当事者が生きやすい社会をつくるため、ロビイングをはじめ、啓発やトレーニング、情報発信などさまざまな活動に取り組んでいます。代表理事の山本潤さんと、広報担当のSさんにお話をうかがいました。

はじまりの物語

「実父から受けた性暴力被害」

山本さんは13歳の時、実の父親から性暴力を受けた。夜寝静まると自分の布団に入ってくる父親に抵抗できず、何が始まるのか、何が起きているのかも理解できず、混乱するばかりの日々。それから7年間に渡り、父親の加害行為は続き、エスカレートしていった。心は耐えきれなくなり、何も考えず、何も感じないように過ごしたという。21歳の時に両親が別れてようやく加害行為は止んだが、そこで山本さんが苦しみから解放されることはなかった。「性被害という経験の中に閉じ込められて、抵抗できなかった自分の無力感に苛まれ、泥沼に入って息もできないような感覚。全てを感じないことで何とか生きることになっていた。そんな状態でした」

20代の後半から看護師として働き始めた山本さんは、病院の救急病棟で自殺未遂の人やDV被害者、虐待を受けた子どもなど、緊急搬送されて来る多様な患者に接した。時に死を望むほどの生きづらさを抱えた患者の苦しみや怒り、憎しみといった感情に接する中で、自分の苦し

さ、生きづらさが重なり、何か行動したいという思いにつながっていったという。さまざまなトラウマ症状に苦しめられながら、山本さんは31歳の時に自分の被害経験と向き合い始める。32歳で性暴力被害者支援看護職（SANE）養成講座を受講。2010年から自分の顔と名前を公表して講演や執筆活動を開始した。

110年ぶりに刑法改正を實現

これまで刑法は、性暴力・性犯罪に関して、強姦罪及び準強姦罪、強制わいせつ罪及び準強制わいせつ罪の成立要件が限定的であることや、罰則における法定刑の下限が低すぎることで、被害者の告訴がなければ告訴できない親告罪であることなど、被害者の実情と法律の規定との間に大きな溝があった。2015年7月に行なわれた国会の院内集会に参加した山本さんは、性暴力被害の実態を理解していない刑法学者や法曹関係者が、被害者に多大な影響を与える法律の検討に関与している実態に強いショックを受ける。そこで同年8月に性暴力被害者と、性暴力を自分の事として考えるメンバー等により「性暴力と刑法を考える当事者の会」を結成し、刑法が性暴力の実態に見合う法律になるよう、勉強会や意見発信を始めた。2016年秋からは、この問題を重視する複数の当事者団体や市民活動団体と協働して「刑法性犯罪改正！プロジェクト」を結成。積極的にロビイング

やワークショップ、情報発信などを行う「ビリーフキャンペーン」を展開した。こうしたひたむきな取り組みが実り、2017年6月、明治以来110年ぶりに刑法の性犯罪規定が改正され、同年7月に施行された。

具体的な改正点としては、①強姦罪、準強姦罪の名称を強制性交等罪、準強制性交等罪と変更し、処罰対象の行為に、口腔性交や肛門性交等も含める。②被害者に男性も含める。③法定刑の下限を3年から5年に引き上げる。④親（保護者）による「監護者わいせつ及び監護者性交等罪」を新設。⑤親告罪から非親告罪への変更。などが挙げられる。

改正前の刑法の問題点が大きく改善される一方で、強制性交等罪、準強制性交等罪の処罰対象行為に含まれていない性行為がまだあることや、監護者わいせつ及び監護者性交等罪の処罰対象となる監護者には、「教師と生徒」、「医者と患者」、「福祉サービス支援者と利用者」、「雇用関係」等々における利害関係や上下関係、権力関係で問題となり得る対象が含まれていないこと。また強制性交等罪、準強制性交等罪には被害者が暴行・強迫されていたかという要件が残り、性犯罪が互いの同意に基づかない性行為だという位置づけになっていない等の重要な問題が残されている。

「人を信じるハードル」を

乗り越えて

法改正を受けて2017年6月に山本



イベント「社会を変えるOne Voice」(2018年6月実施)の様子



さんは「性暴力と刑法を考える当事者の会」を解散。改正の附則に3年後の見直し盛り込まれたことから、そこに向けて新たに一般社団法人Springを設立した。同年9月に行なわれたSpringのキックオフイベントからスタッフとして活動しているSさんは、自治体の女性相談の窓口で山本さんが執筆した著書※のを知り、顔と実名を公表して被害経験を語っていることに衝撃を受けたという。その後、ビリーブキャンペーンの報告会に参加したSさんは「山本さんが『男性は敵ではない』と話す姿がとても印象的でした。ロビイングの必要性を説き、関係省庁や政治家が動いてくれると信じる事の重要性を伝えていた。性暴力被害の当事者にとって、被害による

孤立や二次被害を重ねる中で、人を信じることのハードルが高くなってしまっている、山本さんはそれを持ちこえていて。人を信じるのでできるところまで達しているのがすごいと思った。自分もそうなりたくて、活動に加わりました」と参加した経緯を話す。

「被害者中心」という考えが

根づいた社会に

性暴力被害者への支援の在り方についてSさんは「支援機関が十分になく、支援に関わる情報も足りていないと感じます。性暴力被害者は、力をなくし、われにもすがらうような状態なのに、支援機関を自分で探して、足を運ぶエネルギーが求められてしまう。被害者が頑張らなければ助からないような状況にある」と課題を指摘する。山本さんは「大切なのは被害者の価値観や思いを知り、希望に沿った支援が実施されることです。そう

なることで、健康さや健全性を取り戻し、問題を明らかにし、性暴力を容認したり見過ごすような文化を変え、性暴力のない社会を実現できるのではないかと被害者を中心とした支援の構築と実践の必要性を強調する。

自分の経験を伝えることで

社会を変えたい

法律を変えても市民の認識が変わらなければ、被害者が周囲の人や支援者、関係者から逆に責められ、傷つけられてしまう二次被害もなくなるらない。普通の市民が性暴力被害についての正しい理解と対応を身につけることが非常に重要だとした上で、山本さんは「これまで性被害当事者で表に出てくる人は少なかった。当事者がどんな風に生きているのか、知られていなかった。声をあげることができなかった全国の被害者たちに私たちが立ち上がった姿を知ってもらい、『あなた

一人じゃないよ』というメッセージを伝えたい。また、当事者が立ち上がったことで、これまで見えなかった被害者という存在の意見を、特に政策や法律に対して届け、発信していける。それが性被害当事者の居場所を作ったり、生きやすい社会をつくることにつながると思う。自分の経験を伝えることで社会を変えていきたい」とこれからの想いを語る。

最後に山本さんは「省庁や議員、警察や司法関係者などに自分の意見を伝えることで、少しでも被害者への支援の改善に反映されることが、私自身のエンパワメントにもつながっています。好循環を広げていければ」と希望を話す。そしてSさんは「同じような想いを抱えてきた仲間の声を聞くと、やっぱり自分もやらなければと思う。仲間と活動していくことが自分の力になる。今はとても充実しています」と微笑んで語った。

佐藤新哉(編集部)
安井 忍(相談担当)

一般社団法人 Spring

URL : <https://ameblo.jp/spring-voice-org/>

キーワード

性被害当事者支援、性暴力被害者支援、性被害に関する施策提言

「性暴力と刑法を考える当事者の会」を前身に、2017年7月に一般社団法人として設立。同年6月に110年ぶりに刑法の性犯罪処罰規定が改正されたが、未だ多くの課題が積み残されており、改正時の附則に盛り込まれた2020年の見直しに向けて、性暴力の実態を社会に伝え、実態に即した刑法改正を求める世論の喚起および、性被害当事者が生きやすい社会の実現をめざして活動している。団体名には「性被害による凍りつきから動き始め、春(Spring)が訪れますように」というメッセージが込められている。

メンバー

性被害当事者および支援者

活動内容

ロビイング(ロビー活動)、セミナーやトレーニングを通じた当事者エンパワメント、調査研究活動、情報発信等。

連絡先

info@spring-voice.org

※「13歳、『私』をなくした私〜性暴力と生きることのリアル」
山本潤著
朝日新聞出版
ISBN:
9784022514530
定価:1512円(税込)





Vol
16

法政大学多摩ボランティアセンター

あなたのまちの **キラッと☆**
ぼらせんナビ

ボランティア・市民活動センター、略して「ボラセン」をご存じですか？ボラセンは、あなたの住むまちにもある、あなたのボランティア活動・市民活動をサポートする窓口です。このページでは、毎号各地域のボラセンに登場していただき、メッセージとともに、その特色や利用の仕方などを伝えてもらいます。



熊本益城町支援のひとコマ。



学生の想いから始まった気仙沼市の花火大会でのボランティア活動。



相原地区交流プログラム竹カフェ。地域交流も活発に行っている。

特に多摩ボランティアセンターの企画の特徴としては、学生の長期休みを利用した被災地支援（宮城県気仙沼市・熊本県益城町）とキャンパスの地元（町田市相原町）地域との交流企画に力を入れていることです。

法政大学多摩ボランティアセンターは、2009年4月に法政大学多摩キャンパスに開設されました。当初より大学生のボランティアの促進を目的に、大学内外のボランティア情報を公開し、学生に提供をしています。また、相談対応やイベントなどを行っています。年間のべ500名を超える学生が来室しており、ボランティアの紹介とは別に約20の企画を実施しています。その企画実施にあたっては、20名を超える学生が学生スタッフとして、企画の立案や運営を担って活動しています。

多摩ボランティアセンターでは、こうした学生スタッフの活動を学生の自由な発想と活動を尊重し、育ていくというスタンスで、実現の可能性や安全性などに気を配って助言しています。責任を持って社会的に意義のある活動が展開できるように支えています。

今年で4年目となる気仙沼市大谷海岸の花火大会での活動のきっかけは、学生スタッフの想いと行動からでした。その企画を始めた学生は、被災地の手助けを行いたい、自ら多くのボランティアセンターに連絡をとり、花火大会の活動を考えました。今では現地に行く、「今年もまた来てくれたね」と現地の方々が生たちの名前を呼びながら、笑顔で迎えてくれます。

学生スタッフの想いを形に

今年で4年目となる気仙沼市大谷海岸の花火大会での活動のきっかけは、学生スタッフの想いと行動からでした。その企画を始めた学生は、被災地の手助けを行いたい、自ら多くのボランティアセンターに連絡をとり、花火大会の活動を考えました。今では現地に行く、「今年もまた来てくれたね」と現地の方々が生たちの名前を呼びながら、笑顔で迎えてくれます。

学生スタッフ達は、積極的に現場に行き、地元の方々とコミュニケーションをとり、企画を実施しています。

学生スタッフが企画・運営を担う大学ぼらせん！

法政大学多摩ボランティアセンター

開室：平日9：00～11：30／12：30～17：00

<http://www.hosei.ac.jp/volunteer/index.html>（市ヶ谷・小金井・多摩共通）

✉ tama-vc@hosei.ac.jp

〒194-0298 東京都町田市相原町4342

TEL：042-783-2073 FAX：042-783-2074

Vol.
15

認定NPO法人 ESAアジア教育支援の会



1

ESAはバングラデシュとインドの社会の底辺で生きる子どもたちに教育の機会を提供し、貧困から脱せられるよう支援しています。学業だけでなく子どもたちの個性が引き出せるような活動も行っています。8月には現地の子どもたちの初の絵画展を開催。絵を描くことが初めて、という子も多かったのですが、個性の光る作品がたくさん集まりました。そんな作品をずっと覚えていてほしい、子どもたちをいつも感じてほしいとトートバッグを制作しました。この他、ESAはオリジナルスライスも販売、収益金は教育支援に使われます。商品の販売やご購入にご協力ください。ネット販売の他、出張販売も承ります。



2

認定NPO法人 ESAアジア教育支援の会

所在地 東京都狛江市東和泉1-23-3-101

TEL 03-5497-2261 **FAX** 03-5497-2262

E-mail info@esajapan.org

HP www.esajapan.org

Facebook https://ja-jp.facebook.com/ESAアジア教育支援の会-507372272725777/

ESA アジア教育支援の会
Education Sponsorship in ASIA

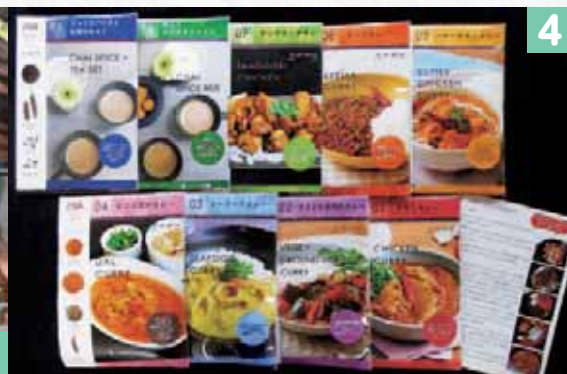
①支援先の子どもたちの絵がトートバッグになりました! L 1200円、S 800円 全10種類。デザインはブログをご参照ください。②「絵」を通して、子どもたちは自己表現を学び、達成感を得る喜びを知りました。③白い紙を手にとすると驚くほどの集中力を見せた子どもたち。④オリジナルカレースライスも絶賛販売中です。



3



3



4



Sampo Japan
Nipponkoa
Welfare Foundation

公益財団法人 損保ジャパン日本興亜福祉財団

社会福祉分野で活躍するNPOへの助成などを通じて、
地域福祉の向上に貢献することを目指しています。

「2018年度NPO基盤強化資金助成」 2つのプログラムで募集をしています！

組織および事業活動の強化 資金助成

NPOの基盤強化となる「組織の強化」と
「事業活動の強化」に必要な資金を助成します。

募集期間 9月3日(月)～10月12日(金)

募集地域 **東日本地区**に所在する団体

助成対象者 特定非営利活動法人・
社会福祉法人

助成金額 1団体50万円上限
(総額1,000万円を予定)

助成内容 組織の強化と事業活動の強化に必
要な費用(人件費、講師謝金、備品
購入費など)

認定NPO法人取得 資金助成

地域の中核となり、持続的に活動する質の高
いNPO法人づくりを支援し、「認定NPO法
人」の取得に必要な資金を助成します。

募集期間 9月3日(金)～10月12日(金)

募集地域 **日本全国**

助成対象者 社会福祉分野で活動し認定NPO法
人の取得を計画している特定非営
利活動法人

1団体30万円(総額600万円)

助成内容 「認定NPO法人」の取得に関する費
用であれば、用途は問いません。



本年度は終了しました

自動車購入費助成(公募)

主に障害者福祉団体が、自動車を
購入する費用を助成します。



本年度は終了しました

基盤強化資金助成

住民参加型福祉活動資金助成(公募)

地域における複合的な生活課題に地域住民が主体となっ
て包括的な支援を行う活動に資金を助成します。



損保ジャパン日本興亜福祉財団 Web ⇒ <https://www.sjnk wf.org/>

ISBN978-4-909393-07-4 C2036 ¥371E